

自由研究発表

台湾のトコ・インド  
—その歴史と役割—

*Toko Indo in Taiwan: Its History and Function*

柴山 元 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

SHIBAYAMA Gen (Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto  
University)

本研究は、台湾各地に点在するインドネシア商店（トコ・インド）の歴史と役割を明らかにするものである。

現在、台湾には30万人を超えるインドネシア出身者が居住している。彼らは、移民時期や移民理由を基準に、①帰国華僑、②留学生（元留学生）、③婚姻移民、④移民労働者に大別できる。多くの先行研究においても、この4分類は自明のものとして扱われており、この分類に立脚して人類学や社会学、政策研究、華僑華人研究などの分野で豊富な研究が蓄積されてきた。しかしそのために、各移民集団間に実際に存在する人的・社会的なつながりやそこでのやりとりが論じられることはあまりなかった。

そこで本研究は、現在保持する国籍やエスニシティ、宗教、階層の差を越えてインドネシア出身者が結集する場所の事例として、インドネシア商店を取り上げる。インドネシア商店は、帰国華僑や婚姻移民、元留学生によって経営され、留学生がアルバイトとして働き、婚姻移民や移民労働者が顧客となる場である。そこでは、インドネシアから輸入した食品や雑貨、料理が販売・消費されるほか、インドネシアへの送金業務も行われる。また、インドネシア商店はこうした経済活動の場であると同時に、異郷で暮らすインドネシア出身者にとって助け合いの場や憩いの場としても機能している。

本研究は、台湾におけるインドネシア商店の歴史と現状を概観したうえで、インドネシア商店でインドネシア出身者が実践する非経済的な活動に着目し、インドネシア商店が台湾に居住するインドネシア出身者にとってどのような場所であるのかを明らかにする。特に、インドネシア商店内部における彼らの日常的な実践を考察し、彼らがいかなる活動を通じて、インドネシア出身者としてより包括的なつながりを構築しているのかを明らかにする。